

## 社会的迷惑行為の生起要因に関する検討

—行為時における社会的影響性の認知および状況認知に着目して—

### A Study of the Cause of Social Annoyance

: Focusing on Perception of Social Influence and Situational Cognition When They Do

丹村 明寿香

(教育心理学領域)

#### 問題と目的

近年、社会的迷惑行為が注目を集めている。こういった迷惑行為に対して認知者・行為者それぞれの観点から、様々な研究がなされてきている。これらの研究の多くは、個人特性との関連を検討したもので、個人特性は、迷惑認知や迷惑行為を促進する、または抑制することが示されている。しかし、何故迷惑行為が実行されるのかについて、一貫した結果は得られていない。この点について、原田(2009)は、「迷惑と認知していながら行われる迷惑行為」と「迷惑と認知していないまま行われる迷惑行為」とを区別する必要性を指摘し、迷惑と認知していながら行われる迷惑行為については、規範意識を高めるだけでは行為の抑制には繋がらない可能性を示唆している。そのため、迷惑と認知していながら行われる迷惑行為が何故実行されてしまうのかということ、個人の規範意識以外の観点から検討することは、とても重要であると考えられる。

以上のことから、本研究は、迷惑と認知していながら行われてしまう迷惑行為を取り上げ、その生起過程および関連する要因を明らかにすることを目的とし、検討を行った。具体的には、まず研究1において、人は何を基準として迷惑であると判断しているのかについて検討し(研究1-1)、その迷惑認知がどのように行動に関連しているのかについて検討する(研究1-2)ことにより、迷惑行為がどのように実行されるのかについて検討した。次に、研究2において、これまで迷惑認知および迷惑行為実行との関連が検討されてきた個人特性について、迷惑行為が生起するプロセスのどの過程に影響しているのかについて検討した。また、研究3において、状況認知という観点から、迷惑行為に関する手がかりへの注目および解釈と迷惑行為実行との関連について検討した。

#### 研究1-1

個人の迷惑認知に関連する要因として、他者の迷惑認知、評価の重要度による重み付けをした他者の迷惑認知、社会的影響性の認知を取り上げ、それらの関連

を検討した。

#### 方法

**調査対象者** 大学生 410 名 ( $m=168, f=242$ )。

**調査時期** 2009 年 7 月初旬～中旬

**調査方法** 授業時間を使って一斉に行い、調査者が配布回収した。但し、一部の授業においては、担当教授により配布回収をお願いした。

**質問紙構成** 大学構内で頻繁に生起する迷惑行為である「自転車の駐輪違反」と「授業中のおしゃべり」を取り上げた。(1) **個人の迷惑認知**: 他者が迷惑行為をしているのを目撃したらどの程度迷惑であると感じるのかについて、4 件法で回答を求めた。(2) **他者の迷惑認知**: 山際・堀(1991)の他者の分類を参考に、親しさと上下関係によって他者を分類した。そして、それぞれの他者が、回答者が迷惑行為をしているのを目撃したらどの程度迷惑であると感じると思うのかについて、4 件法で回答を求めた。(3) **他者の重要度**: (2) で用いた他者からの評価がそれぞれどの程度重要であるのかについて、5 件法で回答を求めた。(4) **社会的影響性の認知**: 石田ら(2000)の迷惑認知の根拠の分類を参考に、迷惑行為の被害を受けるのが行為時か行為後なのか、また直接的に被害を受けるのか間接的に被害を受けるのかによって、迷惑行為の被害を受ける人を設定した。そして、それぞれの人について、冷静に考えてどの程度影響を及ぼすと思うのかについて、5 件法で回答を求めた。

#### 結果

##### 個人の迷惑認知と他者の迷惑認知、および評価の重要度による重み付けをした他者の迷惑認知との関連

個人の迷惑認知と他者の迷惑認知、および評価の重要度による重み付けをした他者の迷惑認知との関連について検討するために、迷惑行為ごとに両者の相関係数を求めた (Table 1)。

その結果、他者の迷惑認知をしている人ほど、個人の迷惑認知が高くなるということが示された。

また、評価の重要度を考慮した他者の迷惑認知と個人の迷惑認知では、評価が重要である他者の迷惑認知

との関連が、他者の迷惑認知だけの関連よりも強くなることが示された。

Table 1

他者の迷惑認知と個人の迷惑認知との相関、および評価の重要度を考慮した際の個人の迷惑認知との相関

		迷惑認知	認知×重要度
自 転 車 反 の 駐 輪	①仲の良い友達	.32 **	.28 **
	②顔見知りの学生	.43 **	.37 **
	③知らない学生	.38 **	.32 **
	④親しい先生	.33 **	.29 **
	⑤顔見知りの先生	.33 **	.30 **
	⑥知らない先生	.34 **	.30 **
授 業 中 の お し や べ	①仲の良い友達	.46 **	.43 **
	②顔見知りの学生	.46 **	.42 **
	③知らない学生	.39 **	.33 **
	④授業をしている先生	.30 **	.37 **
	⑤親しい先生	.23 **	.29 **
	⑥顔見知りの先生	.20 **	.28 **
	⑦知らない先生	.19 **	.25 **

注：\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

### 個人の迷惑認知と社会的影響性の認知との関連

社会的影響性の認知と個人の迷惑認知との関連について検討するために、両者の相関係数を求めた。その結果、行為時にその場にいる人だけではなく、より多くの人に迷惑を及ぼすということを認知している人ほど、個人の迷惑認知が高くなるということが示された。

### 考察

どういった他者であるかということとは関係なく、他者の迷惑認知は個人の迷惑認知と正の関連をしていた。つまり、他者の迷惑認知を高く認知する人ほど、個人の迷惑認知も高くなるといえる。これは、戸田・小林（2007）と一致した結果であった。また、迷惑行為の種類によって、どういった他者の評価が重要であるのかが異なることから、評価の重要度を考慮した場合に、個人の迷惑認知が受ける影響が異なるということが示された。

このことから、他者の迷惑認知を高く認知している人ほど、また、より多くの人に迷惑を及ぼすことを認知している人ほど、個人の迷惑認知が高くなるといえる。また、行為によって、どの他者の評価が重要であるのかが異なることから、行為の種類やどういった他者に迷惑を及ぼすと認知しているのか、さらに、その他者の評価が重要かどうかによって、個人の迷惑認知が受ける影響は異なると考えられる。

### 研究 1-2

迷惑行為実行に関連する要因として、個人の迷惑認知と社会的影響性の認知を取り上げ、それらの関連について検討した。

### 方法

調査対象者、調査時期、調査方法 研究 1-1 と同様  
質問紙構成  
迷惑行為の実行に関する指標

（1）迷惑行為の実行頻度：回答日から過去 1 年以内の経験頻度について、回答を求めた。（2）迷惑行為に対する抵抗感：迷惑行為を行うことに対してどの程度抵抗感を感じるかについて、4 件法で回答を求めた。

### 社会的影響性の認知

（1）行為時：研究 1-1 の質問紙（4）で用いた人について、迷惑行為をするときにどの程度意識したかについて、5 件法で回答を求めた。（2）冷静時（3）個人の迷惑認知：研究 1-1 と同様

### 結果

### 迷惑行為の実行と個人の迷惑認知との関連

個人の迷惑認知と迷惑行為への抵抗感や頻度との関連を検討するために、個人の迷惑認知と実行頻度、抵抗感との相関係数を求めた。その結果、個人の迷惑認知と頻度との間には負の相関、抵抗感との間には正の相関が見られた。

### 行為時および冷静時の社会的影響性の認知との関連

冷静に考えた状況での社会的影響性の認知と、行為をする状況での社会的影響性の認知は異なると考えられる。そこで、行為時の社会的影響性の認知、および冷静時の社会的影響性の認知と頻度、抵抗感との相関係数をそれぞれ求めた（Table 2）。

Table 2

冷静時、行為時の社会的影響性の認知と迷惑行為実行の頻度と抵抗感との相関

		頻度		抵抗感	
		行為時	冷静時	行為時	冷静時
自 転 車 反 の 駐 輪	①その場にいる人	-.10 *	-.08	.37 **	.32 **
	②後から利用する人	-.10 *	-.07	.39 **	.32 **
	③近くを通る人	-.14 **	-.10	.31 **	.26 **
	④係りの人	-.14 **	-.11 *	.25 **	.16 **
	⑤学校へのイメージ	-.09	-.12 *	.28 **	.27 **
授 業 中 の お し や べ	①教室内の仲の良い友達	-.22 **	-.23 **	.33 **	.38 **
	②教室内の顔見知りの学生	-.23 **	-.20 **	.31 **	.35 **
	③教室内の知らない学生	-.25 **	-.19 **	.34 **	.28 **
	④授業をしている先生	-.19 **	-.15 **	.31 **	.22 **
	⑤学校へのイメージ	-.15 **	-.17 **	.25 **	.24 **

注：\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

その結果、行為時の社会的影響性の認知のほうが、頻度、抵抗感との間により強い関連が示された。

### 考察

個人の迷惑認知は実行と関連しており、行為者が迷惑であると認知している迷惑行為は実行されにくいといえる。また、行為時の社会的影響性の認知のほうが、迷惑行為実行と強く関連していたことから、普段迷惑行為の社会的影響性を認知していても、行為時に意識することが出来なければ迷惑行為の抑制には繋がりにくいと考えられる。

### 研究 2

共感性、自己意識、行動基準という個人特性を取り上げ、行為時・冷静時の社会的影響性の認知や他者の迷惑認知、および個人の迷惑認知と実行頻度、抵抗感との関連を検討した。

## 方法

調査対象者、調査時期、調査方法 研究 1-1, 1-2 と同様

質問紙構成 (1) 共感性: 小池 (2003) の共感性尺度の計 13 項目について 5 件法で回答を求めた。(2) 自己意識: 辻 (1993) の自己意識尺度の計 15 項目についての 5 件法で回答を求めた。(3) 行動基準: 菅原ら (2006) の行動基準尺度の計 20 項目について、5 件法で回答を求めた。(4) 迷惑行為の経験頻度、迷惑行為に対する抵抗感、個人の迷惑認知: 研究 1-1, 1-2 と同様

## 結果

### 個人特性と社会的影響性の認知、および他者の迷惑認知との関連

個人特性と社会的影響性の認知、および他者の迷惑認知との関連について検討するために、それぞれの相関係数を求めた (Table 3)。

Table 3

個人特性と他者の迷惑認知、および社会的影響性の認知との相関

		自転車の駐輪違反			授業中のおしゃべり		
		社会的影響性の認知 行為時	他者の迷惑認知 冷静時	他者の迷惑認知 感認知	社会的影響性の認知 行為時	他者の迷惑認知 冷静時	他者の迷惑認知 感認知
共感性	情動的共感性	.05	.06	.05	.05	.01	.07
	認知的共感性	.11 *	.09	.03	.14 **	.03	.04
自己意識	私的自己意識	.22 **	.14	.18 *	.39 **	.19 *	.19 *
	公的自己意識	.28 **	.27 **	.04	.32 **	.22 **	.12
	地域的セケン	.20 **	.13 *	.07	.19 **	.22 **	.25 **
行動基準	仲間的セケン	.05	-.03	.02	.04	.06	.03
	自分本位	-.16 *	-.14 *	-.10	-.18 **	-.15 *	-.10
	他者配慮	.32 **	.19 **	.04	.41 **	.30 **	.22 **
	公共利益	.27 **	.17 **	.10	.24 **	.27 **	.19 **

注: \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

その結果、共感性の高い人は、行為時にその行為が他者に及ぼす影響を意識しやすく、また、自己意識の高い人や周囲の他者からの評価を重視する人は、他者の迷惑認知や社会的影響性の認知が高くなることが示された。

### 個人特性と個人の迷惑認知、および迷惑行為実行との関連

個人特性と個人の迷惑認知、および迷惑行為実行との関連について検討するために、それぞれの相関係数を求めた。

その結果、自己意識の高い人や周囲の他者からの評価を重視する人は、迷惑行為の実行に抵抗を感じやすいことが示された。

## 考察

認知的共感性と行為時の社会的影響性の認知との間に関連が見られた。また、私的自己意識は行為時の社会的影響性の認知や抵抗感との関連が見られ、公的自己意識は社会的影響性の認知との関連が見られた。さらに、自分本位、地域的セケンや他者配慮という行動基準が社会的影響性の認知、抵抗感と関連していた。このことから、他者の気持ちを考えて行動できる人や、個人の迷惑認知が高い人は、抵抗感を強く感じるといえる。しかし、個人特性と実行との間に関連が見られなかったことから、抵抗感が高まるだけでは、迷惑行

為の抑制には繋がりにくいと考えられる。

## 研究 3

状況認知という観点から社会的迷惑行為を捉え、社会的手がかりへの注目や手がかりの解釈と、迷惑行為実行との関連を検討した。

## 方法

実験対象者 大学生 80 名 ( $m=33$ ,  $f=47$ )。

実験時期 2009 年 12 月初旬～中旬

提示刺激 大学構内にある、1 箇所の駐輪場を別の角度から写した 2 枚の写真を、5 秒間ずつ続けて提示した。提示写真の選定に際しては、実験対象者が、その行為が迷惑をかけうる行為であることに関連する手がかりに気づけるかどうか、そして、その手がかりをどのように解釈をするのかを検討できるように、指定区域に止まっている自転車、駐輪違反をしている自転車とともに適度にある場所を選択した。写真は、駐輪違反に関連する情報を含み、かつ指定区域内には、自転車を止めることが出来そうなスペースが含まれているものを選定した。

実験方法 実験は、スライドを見てその内容について回答をする部分と、実験対象者自身のことについて回答をする 2 つの部分から構成されており、実験対象者は回答冊子に回答を書き込むという形で実験を行った。実験は全て実験者の教示に基づいて進めてもらい、所要時間は 30 分程度であった。まず、実験対象者に、自転車で大学に来ており、今自転車を止めるところであるという状況をしっかりと想像しながら、2 枚の写真を続けて 5 秒ずつ見てもらった。その後、写真に写っていた駐輪違反に関連する手がかりについて、どの程度気づいたか、そして、気づいた手がかりに対してどのようなことを考えたのかについて回答してもらった。また、写真に写っていた駐輪違反に関連する手がかりについて、どの程度記憶していたかについて、回答してもらった。その後、行動基準や迷惑行為の実行頻度などを回答してもらい、実験を終了した。

### 回答冊子・質問紙構成

#### 注目の段階について

(1) 実際に駐輪違反に関連する手がかりに注目できていたかについて、写真に写っていた 5 つの駐輪違反に関連する手がかり (「駐輪場が指定区域と指定区域外に区別されていること」「指定区域からはみ出して駐輪してある自転車」など) にどの程度気づいたかを 3 件法で回答を求めた。(2) 駐輪違反に関連する手がかりに対して、強く注目しているほど、記憶として残ると考えられるので、写真に写っていた 5 つの駐輪違反に関連する手がかり (「指定区域を示す線は何色でしたか」「自転車は全部で何台くらい止まっていたか」など) に関する記憶を選択肢の中から選んでもらい、記憶の正確さの指標とした。

## 解釈の段階について

(1) 注目した駐輪違反に関連する手がかりをどのように解釈したのかについて、注目段階の(1)の手がかりにおいて、どのようなことを考えたのかを4つの選択肢から選んでもらった。なお、(1)の質問で「全く気づかなかった」という回答をした人については、回答を求めなかった。

## 個人特性について

(1) 研究2で用いた菅原ら(2006)の行動基準尺度の計20項目について、5件法で回答を求めた。

## 迷惑行為の実行頻度について

(1) 過去1年間における自転車の駐輪違反の経験頻度について、回答を求めた。(2) 自転車の駐輪違反をついやってしまう程度について、6項目(「指定区域外であると分かっている、つい駐輪してしまう」「人の邪魔になると分かっている、ついつい指定区域からはみ出して駐輪してしまう」など)を作成し、3件法で回答を求めた。

## 結果

### 迷惑行為実行と注目段階、解釈段階および個人特性との関連

迷惑行為実行と注目段階、解釈段階との関連を検討するために、頻度およびついでしてしまう程度と、注目段階、解釈段階と個人特性との相関係数を求めた。その結果、頻度、ついでしてしまう程度両方とも、注目段階、解釈段階との間に有意な相関は見られなかった。また行動基準との間においても、有意な相関は見られなかった。

### 注目段階、解釈段階と行動基準との関連

行動基準と、注目段階、解釈段階との関連を検討するために、両者の相関係数を求めた(Table 4)。

Table 4 行動基準と情報処理段階との相関			
	気づき	記憶	解釈
自分本位	-.07	-.09	-.18
同情的セケン	.17	-.08	.18
地域的セケン	.14	.08	.26 *
他者配慮	.17	-.19	.28 *
公共利益	-.01	.02	.05

注: \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

その結果、解釈段階と地域的セケン、他者配慮の間に正の相関が見られた。

## 考察

周囲の他者からの評価を重視する人は、迷惑関連情報について、周囲の他者への影響を考慮した状況認知を行っているといえる。しかし、手がかりへの注目や解釈が実行と関連していなかった。その原因として、迷惑行為の罰則の弱いことや、実行に際して、他者からの評価が自己の不利益に繋がりにくいことから、適切な注目や解釈が抑制に大きな影響力を持たず、自己

の都合を優先させ、実行されやすいことなどが関連していると考えられる。また、迷惑行為に関する手がかりへの注目は、迷惑行為を抑制するだけではなく、促進する可能性も考えられる。

## 総合考察

これら3つの研究を通してまとめてみると、①迷惑行為には、個人の迷惑認知を高めることや、他者への影響性を意識できることは、抵抗感を高めることに繋がる。②規範として持っているだけでは、迷惑行為の抑制には繋がりにくく、行為時に意識することが必要。③他者の立場を理解するように促すだけでは迷惑行為の抑制には繋がりにくい。④実行の際には、罰則の弱さなどから、自己の都合が優先されやすいということが考えられる。

## 今後の課題

本研究の問題点として、①経験頻度の低さおよび、自己申告による頻度であること。②場面想定法を用いたこと。③大学構内の行為に絞ったことが挙げられる。また、迷惑行為の実行には、罰則の弱さが関連している可能性が考えられるので、今後これらの点について、行動観察やフィールド実験などを用い、様々な行為について、罰則の弱さによる影響も含めて検討していく必要があると考えられる。

## 引用文献

- 原田知佳(2009). 自己制御と社会的迷惑行為 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆(編) 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版 pp.80.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛(2000). 社会的迷惑に関する研究(2)―迷惑認知の根拠に関する分析― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 25-33.
- 小池はるか(2003). 共感性尺度の再構成―場面想定法に特化した共感性尺度の作成― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 50, 101-108.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤文・薮理律子(2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心―公共場面における5つの行動基準との関連性― 聖心女子大学論集, 107, 160-180.
- 戸田まり・小林亜希子(2007). 大学生の社会的迷惑に関する検討 北海道教育大学紀要(教育科学編), 57, 31-40.
- 辻平治郎(1993). 自己意識と他者意識 北大路書房
- 山際勇一郎・堀洋道(1991). 他者との心理的距離と評価懸念の関係 教育相談研究, 29, 13-17.